

(薩摩郡宮之城町大字虎居字甫立原)

位置と環境

遺跡は町の中心部から北北西に約2.8km離れた、国道328号線の沿線近くで宮之城町の大字虎居から大字平川にわたる標高約115mの瓢箪形の台地上の北側に立地している。

調査の経緯

県営畑地開発の事業計画に伴って、昭和63年に事業計画地の分布調査、平成3年に町教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力を得て、確認調査を実施した。その結果、台地のほぼ中心部に設定したトレンチで押形文土器が出土し、平成5年には本調査（約3,000m²）を実施した。

遺構と遺物

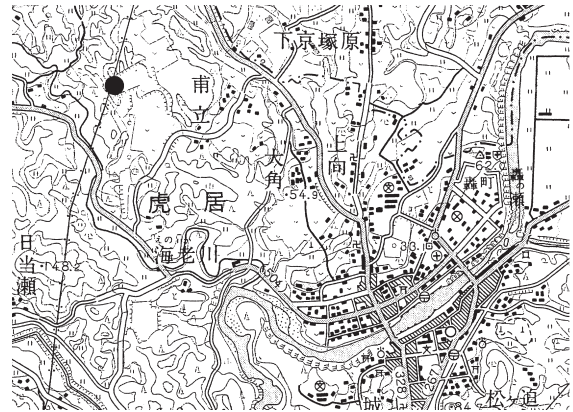
平成3年の確認調査では、縄文時代早期の土器である山形押型文を有する土器片12点がアカホヤ火山灰層下位で出土した。

平成5年の本調査では、アカホヤ火山灰層下位の黒茶褐色土から縄文時代早期の遺構と遺物が出土した。遺構では、集石2基、落とし穴と推定される土坑4基が検出された。また、遺物は、石鏃・スクレイパー・石匙・石斧・磨石・敲石・台石などの石器類、山形押型文を中心とする土器が出土している。特に、2点ではあったが同心円文をもつ土器の碎片も出土している。

北側にある集石1は、黒茶褐色土層面を浅く掘り込みほぼ円形に配列されている。集石の礫には火熱による赤色化や亀裂が生じているものもあり、この集石の下面に混入している炭化材による絶対年代測定の結果によると1950年を基準年として(8,060±370y.B.P.)の値がでている。落とし穴と推定される土坑はいずれも埋土がアカホヤ火山灰層であり、形状は方形プランである。ただ落とし穴として決定づける逆茂木の痕跡は底面には確認できなかった。

石鏃は23点が出土しており、分類に検討を要するが押型文土器に伴うクワガタ鏃3点がある。石匙は挟りがあり下部に刃部を形成しているもの、両側面に刃部を形成しているもの2点である。石斧は挟りをもつ打製石斧が出土したが、刃部が欠損していた。

出土した土器の多くは、山形押型文土器で土器片



第1図 南立原遺跡の位置



写真1 出土した同心円文土器

による復元を試みると口縁部が外側へ開く形状をもつ大型の土器類で、押型文は内面の口縁部にも付けられている。また同時期とおもわれる楕円押型文土器もある。

また、特徴的な土器として、スタンプ状に押型を施した同心円文をもつ土器片3点が出土している。その他出土した土器を分類してみると、外面に撚糸文のある土器、手向山式系土器、石坂上式系土器、縄文時代晩期の黒色磨研土器も出土した。

特徴

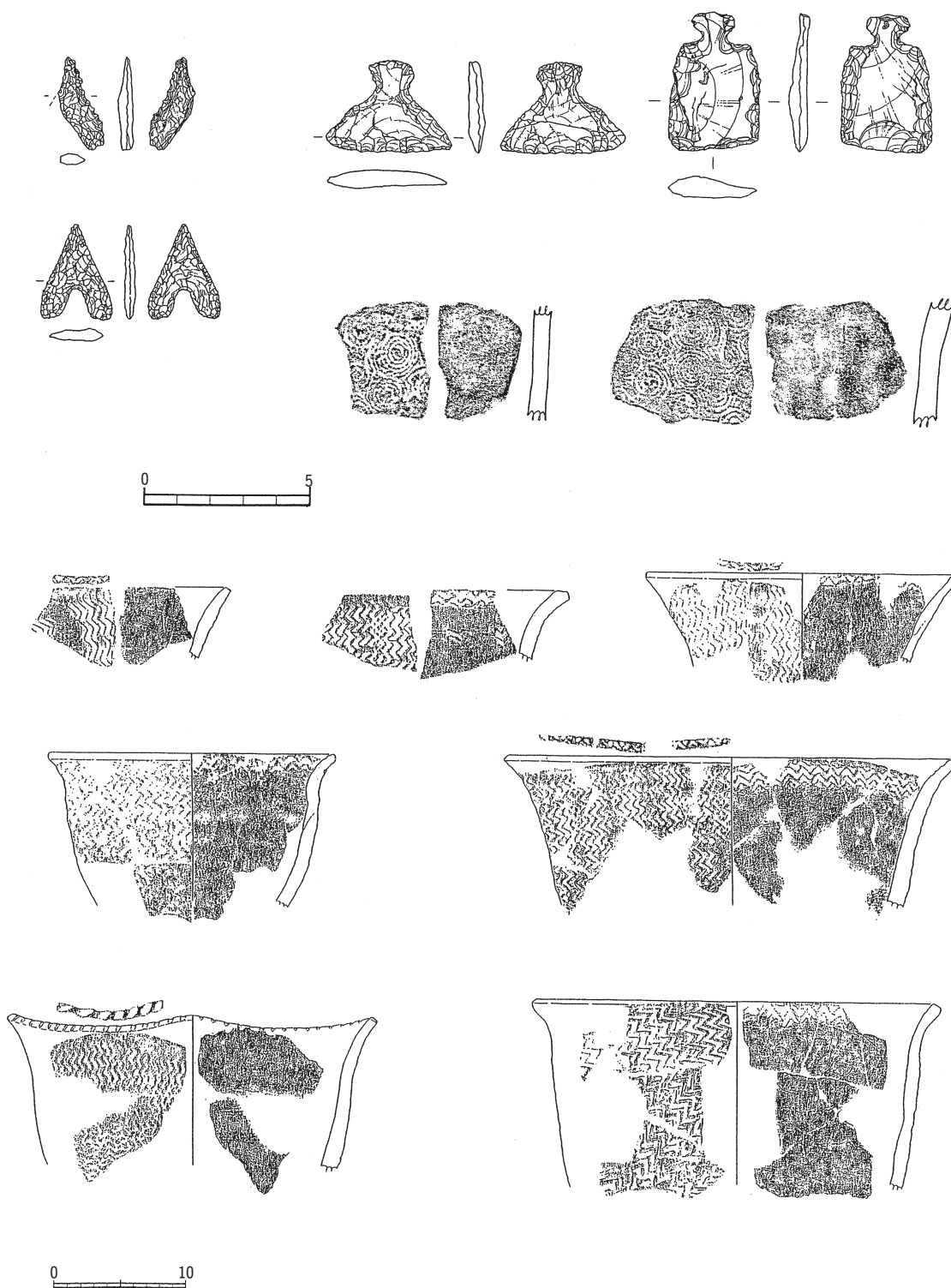
本県の川内川中流域にあたる薩摩郡内で押型文土器を主流とする縄文時代早期の遺跡の発見は初めてである。ただ住居跡は確認されなかったが、押型文土器文化をもつ人たちが一時的にキャンプベスとしてここで生活していたものと思われる。

資料の所在

出土遺物は、宮之城町歴史研修センターに保管・展示されている。

参考文献

宮之城町教育委員会1992「甫立原遺跡」『宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書』2 (川添俊行)



第2図 遺物実測図（石鏃・石匙・同心円文土器・山形押型文土器）